姫子・イン・バリ

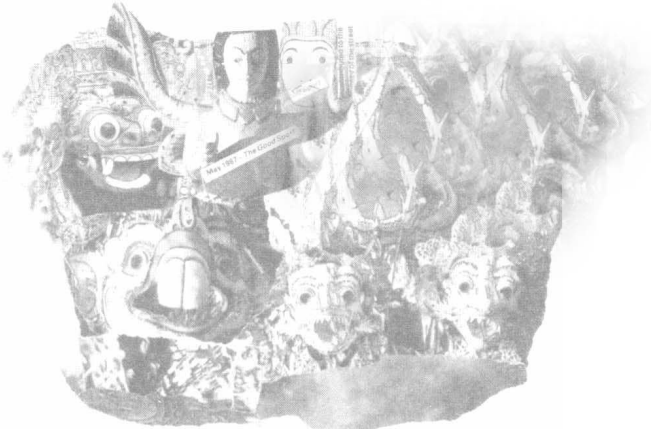
HIMEKO IN BALI

有為エインジェル

姫子・イン・バリ

HIMEKO IN BALI

有為エインジェル



有為（ウイ）エィンジェル

1948年生．パフォーマー，イメージ・メイカーを経て，1969年渡米．71～81年までロンドンで暮す．その間菜食レストランを経営．1981年，「前奏曲（プレリュード）」で群像新人長編小説賞を受賞．著書『前奏曲（プレリュード）』『奇跡』（共に講談社），『姫子・イン・ロンドン』（中央公論社），『ロンドンの夏は素敵』（角川書店）など．

姫子・イン・パリ

定価一二〇〇円

昭和六十二年十二月十日初版印刷
昭和六十二年十二月二十日初版発行

著者　有為エィンジェル
発行者　嶋中鵬二
印刷所　三晃印刷
発行所　中央公論社
〒104 東京都中央区京橋二―八―七
振替東京二―三四
©一九八七　検印廃止
ISBN4-12-001636-6

姫子・イン・バリ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

1

バリがこんなに暑いのは太陽のせいばかりではない。

この粘り着くようなしつこい彼らの視線なのだ。それに「ハロー」「ハロー」と次々に呼びかけてくる、うるさい声……。

路の両側には商店やレストランが軒をならべ、そのまえの石段などに坐りこんだ売り子の少女たちや若い男たちが、今日もまた所在無げにたむろっている。バリ島の北東部に位置するここウブドゥも、いまでは観光化が加速度的に進んでいた。黙ってただ坐っているだけでも、眼前には次から次へと違った世界が現われる。それだけでも彼らの旺盛な好奇心はけっこう充たされるのだ。

「チャンティック！」

「アイ　ウォントゥ　キス　ユー」

「ニホンジン、スキデス」

「ユー　ウォントゥ　ベモ？」

「コレ、ヤスイヨ」

十回に一度ぐらいはアキラも愛想笑いを返したり、ノー・サンキューなどと応じてみるのだが、だいたいは無視して、あとは目的地へ向け、ひたすら歩く。

とはいえアキラはその間の状況を、必ずしも愉しんでいないわけではない。そもそも一日の大半を地べたに坐って過すという、彼らのなんとも優雅で贅沢な時間との関わり合いには、羨望さえも覚えるのだった。

しかし唯一耐えられないのは、たとえばレストランなどで食事をしているときに、いつのまにか向かいの席に腰をおろして、しつこく話しかけてくる図々しい男たちである。そんなことをしてくる男にかぎって、美的水準からは大いにはずれているということも、わずらわしい理由の一つだった。

見知らぬ男性からこのようなアプローチを受けることなどは、日本にいるかぎり、めったにあることではない。しかしここバリでは、人並みの容貌をもった外国女性ならばだれでも、いちおうは似たり寄ったりの体験をしているといってよい。

それにしても自分の場合は、やや度が過ぎるとアキラは感じていた。しかし辟易させられながらも同時に、ウブドゥの男たちの関心は、いま恐らくこの自分にもっとも集中しているだろうといった優越感が、どこかないではなかった。

ワルン（屋台）で、ナシ・チャンプル（御飯に野菜や肉、ジャック・フルーツ、卵などをのせたもの）の昼食をとるため、アキラはメイン通りをプリアタン村へ向かって歩いていた。

ナシ・チャンプルはバリを代表する彼らの常食で、これに関しては西洋かぶれしたレストランなんかで食べるよりも、ぜったいにワルンへ行くにかぎるのだ。とくにプリアタン村の入口にあるワルンの一つは、このあたりでもとびきり旨いナシ・チャンプルを出すので、アキラはこのと

ころ昼どきになると毎日のように出かけていった。

それになんといっても安い。レストランで食べれば千五百から三千ルピーぐらいするのに、そのワルンのナシ・チャンプルはたったの五百ルピー（約五十円）なのである。朝目を醒ますとすぐにこのナシ・チャンプルのことが想い浮かび、朝食はなるべく軽く済ませ、その後はこみあげる胃液の誘惑とたたかいながら、アキラは空腹状態を極力保ちつつ、じっと昼が近づくのを待つ。そして今日はフォークで食べようか、それともバリ人たちのようにおもいきり野蛮に指ではさんで食べてみようかなどと、真剣に考えてみたりもする。

三階以上の建物などひとつもないウブドゥの町並は、そこら中に人間や動物の匂いを染みこませながら、繁雑さを自由奔放にくりひろげていた。

屋台、レストラン、ブティック、両替所、画廊、レンタル・バイク屋、寺、学校、王宮、銀細工屋、市場、映画館と、まったく異質なものどうしが、なにもかも隣合わせに詰めこまれている。そしてたくさんのバリ人に西洋人、たまにみかける日本人、また三日か四日に一度は行なわれる祭事や儀式のための長い行列、あちこちからたえまなくあふれ出るガムラン音楽……。

すぐ後ろには地平線のかなたにまでつづく田園やジャングルがひかえているというのに、実際この一郭だけが、すさまじい喧噪を放っていた。

通りを占拠しているのは人間ばかりではない。似たような顔をした信じられないほどたくさんの犬、それらが道路のまん中にまでのさばり、車やバイクが通ると、すれすれのところでノソリとよける。彼らが元気を出すのは、外国人に向かって吠えているときぐらいだ。しかしいくら吠

えたところで嚙むようなことはまずない。
にわとりも人間になんかおかまいなしで、好き勝手に遊んでいる。親どりをよちよちと追いかけながら、ひよこたちが無心に戯れている光景などには、つい脚を停めたくもなる。
気温がもっとも上昇する日中と暗黒の夜間をのぞいて、メイン通りではあらゆるものが、様々な音をたてながらひしめきあっていた。だからといってそれは日本の大都会が放っているような、すべてが過剰な商魂にあやつられた、あのうんざりする喧噪とは、およそ次元の異なるものだ。
コンクリートの壁や、すきあらば忍びこむ過剰な広告、モダンな高級車、洗練された高価な装い、疲労しきった顔、苛々した顔、急ぎ足……そんなものからはいっさい無縁なのである。その代わりあらゆるものが自然の原理に従いつつ、押しつけがましくなく存在しているため、騒々しさまでが心地よくなってくるという具合だ。
たとえばパリの男たちが外国女性に熱心な興味をいだいて、なんの体裁もてらいもなく、ことばや行動で単純明快にしめしてくることだって、考えてみればごく自然なことなのかもしれない。あの文明人特有の、誇りとか、こみいった感情などとはおよそ無縁だという気がした。
左前方のブティックの石段には売り子や、その仲間らしき少年たちが大勢坐りこんでいた。たがいの躰へやたら触れあい、笑い声をたてながら、なにか他愛もないことにふざけているといった様子だ。そうしながらもアキラが彼らの前まで来ると、こんどはこちらのほうへ次々と冷やかしの声をかけてくる。
中央に坐っている年長の、整った顔立ちをした少年が、自分より二、三齢下(としした)の少年を、大きく

開いたジーンズの間にすっぽりとはさみ、一段上から抱きかかえるようにしていた。実際彼の両腕は相手の胸のまえで交わり、その指先が愛撫でもしているように褐色の肌をなでているのだ。

「何をしてるの、あんたたち？」

アキラは眉を寄せると反射的に問いただした。別に不快感を覚えたからということではなく、ただその二人や残りの少年たちに対して、まるでゲイの小集団とでもいった一種異様な感じを覚えたからである。

少年たちはアキラの問いに答えるわけでもなく、にやにやとしながらバリ語でさらにアキラをからかってくる。しかもその間、たがいの躰に触れあうという状態は依然として続いている。そのことを奇異におもったアキラが、だから立ち停まったということにはいっこうに気づいていない様子なのだ。

そんなことよりも、日本人の、彼らにしたら若く美しくみえるらしい女性が、わざわざ歩みをとめて彼らの相手になったということを無心に歓んでいるといった感じだった。まだ幼さの残った少年たちとはいえ、彼らがアキラを見る眼の奥には、明らかに雄の欲情がこめられている。

いったいこれは何を意味するのだと混乱したアキラは、中央の石段で齢下の少年を抱擁している、彼らのなかでも一番おとなびた少年に向かって、ついこんなことを言ってしまった。

「あんた、その子のこと好きなの？」

にたにたと笑っていた少年の目もとが、つかのまとまどいの色をみせ、それから彼は停止した笑みのまま、しばし呆然とアキラに見入っていた。

彼にはどうやらアキラの質問の意味がよく解らなかったようだ。アキラは自分でもやや下卑てると思われる口調でふたたび訊ねた。

「あんたたち、つまり好きどうしなんでしょ？　でもよかったね、ここがパリで。これがトーキョーやニューヨークだったら完全に誤解されてたよ」

無意識なんだな、よォするに……。アキラは頭を傾げながら、つい日本語でつぶやいた。そんなアキラを見て、少年たちは何がおかしいのか腹をかかえて笑いだした。それから彼らはアキラのことばを真似て、"We like each other!"と、節をつけながらふざけた調子で、えんえんくりかえしていた。

アキラのいわんとしたところを理解したとはとても思えず、莫迦ばかしくなった彼女は途中でぷいと踵を返すと、ふたたびワルンへ向かって歩きだした。

考えてみると、アキラも中学一、二年ぐらいまでは同性と腕を組んで歩いたりすることに、密かなときめきを感じていた時期があった。同じ食べ物を交代でかじりあったり手をとりあったりすることは、親しさの証明でもあったのだ。

しかし日本の少年たちに関しては、格闘技や喧嘩のまねごとをしたりする以外に、肌の触れあいをするなんていうのは、せいぜい小学校三、四年生ぐらいまでではないだろうか？

二日ほどまえ、初めて会った二十二、三ぐらいのパリの女性が、アキラをある店に案内してくれるさい、にこにこと笑みをたたえながら、いきなり腕を組んできたのにもびっくりさせられた。おなじ東洋人とはいえどうやらパリ人のほうが愛情表現においては、日本人よりもはるかに純

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

朴で直截的(ダイレクト)だという気がする。男も女も性的魅力にかなりあふれていながら、どこか子供っぽさを残しているのも、案外そんなところに理由があるのかもしれない。

異性に限らず同性までも、いっしょくたに愛してしまう（？）少年たちの、無邪気な寄りあいを離れた後も、また新たな視線を四方から受けながら、アキラはさらに歩きつづけた。

暑い！

人々の呑気さに較べると、陽差しのほうははるかに攻撃的で、なおいっそう過激な光と熱を容赦なく浴びせてくる。アキラは薄茶色のサングラスをはずすと、バッグの中からいちだんと濃い色のほうのサングラスを取り出し、掛けかえた。このほうがなんとなく暑さが和らぐように感じるのは、まとわりつく視線をある程度は遮断できるからという効果もあるからなのか？

そのとき一台のモーター・バイクが爆音を轟かせながらウブドゥの入口に現われた。とたんに周辺のバリっ子たちの関心が、なぜかいっせいにアキラからそちらのほうへ移された。

そろそろうんざりしかけていた彼らの視線であったのに対象から突然はずされたということは心外で、アキラはやや敵意さえこめながら、バイクの人物に目をむけた。

このあたりで時折みかける、とびっきり美しいバリ人の少年が、外国人らしき女性を後ろに乗せながら得意満面の表情で走ってくる。

ウブドゥに到着した日、宿をさがしていたとき、「いいとこ知ってるよ」と声をかけてきた大勢の男たちのなかに、そういえば彼がいた。しかしまだ来たばかりでバリ人の気質など見当もつかなかったときだけに、用心ぶかいアキラは全員の申し出をことわり、自分の足で現在住んでい

る宿を見つけたのである。

日が経つにつれ、あの少年がこのあたりではどうやらもっともハンサムなうちの一人らしいということに気がついた。あのとき申し出を受けていればと悔やまれたがおそかった。

少年も女も最近さだめられたヘルメット着用の掟などは無視し、少年のほうはそれが自慢らしいウェイヴのきいた、やや長めの黒髪を誇示し、女は女で、ターバンのように巻いた白いきれの先を長々と六、七十センチほども垂らし、おもいきり風に棚引かせていた。

なんだアレは？

嫉妬が駈け足でやってきた。無関心をよそおって視線をはずそうとしたもののままならず、彼らが疾風のごとく眼前を去っていったときには、アキラの口からおもわず日本語が飛び出した。

「スッゲー！」

長々と伸びた白いターバンもさることながら、どちらかといえば素朴で下町ふうな活気を呈した南国の真昼にしては、女の恰好があまりにも豪華絢爛で挑発的すぎたからである。

陽灼けしているのかもともと黒いのか、いずれにしろバリ人にも劣らぬほどに黒い顔には、これ以上は不可能というくらいに西洋ふうな化粧がほどこされ、また服装は服装で、これはバリの伝統文化のメッカともいえるこのウブドゥを、いくらなんでも冒瀆しているとしか思えないような、あまりにも毒々しい都会（ポップ）を放っていたのである。

上から下まで何十種もの色がうめきあい、それが女の躰に入れ墨のごとくぴっしり吸いつき、薄っぺらな胸や、やたら細い腿、脛などをいやというほど強調している。また頸や耳、腕、ウエ

スト、それに足首にいたるまで、可能なかぎりあらゆる箇所へアクセサリー類をぶらさげていたことなども、一瞬のうちに網膜に映しだされた。

少年の座席のまえには大きなトランクが、彼の腕と腿にはさまれながらかろうじて積まれていた。どうやら女はたったいまウブドゥに到着したらしい。

後頭部と額から急に大量の汗が吹きだした。バッグの中から四角いタオルを取り出すと、アキラはなんども汗を拭った。汗かきの彼女はバリへきて以来ハンカチーフの代わりに、いつもタオルをもちあるいていた。

アキラがまだ見ぬバリ島に恋い焦がれるようになったのは極めて最近のことである。バリを訪れた友人たちが、帰国するごとに溜息まじりに洩らすことばが、アキラの躰に段々と麻薬のように浸透してゆき、気がついたときには禁断症状のように居ても立ってもいられなくなり、ついには日本を飛び出してきたという感じだ。

「あのなあ、町いちばんの大金持がだよ、それも外国人を相手にビジネスをやっているようなものが、電話もなしに仕事をしてるんだぜ。それもゴム草履をはいて。どうやって成り立ってんのか、まるで理解できん」

電話がない！　それでも仕事ができる！　それはまさに天国だとアキラは思った。いったいこの世に電話ほど無礼で身勝手で強引で怠惰（つまりこれで大体の事をすませてしまうわけだから）なものもあるだろうかと、アキラは日頃からそれの悪いところだけを取り上げては憤ってい

た。しかしフリーのジャーナリストという職業にある彼女にとって、電話があるかないかということは、まさに死活問題なのだ。

「パリでは何もかもがオープンなの。囲いの中にはいるのは寝るときぐらいじゃないかしら。彼らはほとんどのことは屋根のないところで済ませてるわ。だいたいお金がないからレストランや食堂なんかには行かないし、せいぜい行ったところで屋台でしょ。それに明けても暮れても、村をあげての祭り事をやってるんだもの、それだけでも周囲との関係はたえないわけよ。なにしろ部屋を一歩出たらコミュニケイションが始まるの。孤独なひともいないことはないだろうけど、でもあたしたちのものとはまるで質がちがうわね」

東京に住んでいるものたちにとって、友人に逢うということは、だいたいが飲み屋やレストラン、喫茶店へ行くことを意味している。そして相手が異性である場合はラヴホテルというのが最終コースだ。つまり気に入った相手と交流する場は、ほとんどが屋根のついた囲いの中といってもよく、しかもそれには金がかかるし、時間もとられる。主婦や子供、老人をのぞき、ふつうは近所づきあいというものをしないから、そのつど電車やタクシーに乗ってひとに逢いに行かねばならない。ということは金や時間のない連中は、友だちを作ることさえもできないという考えだって成り立つ。

なんて不思議な現象だろう。人類創始以来、自分たちはいまもっとも便利で豊かな時代に生きているというのに、一方かつてないほど不便で貧しい人間関係をもたらされている。

アキラがいまの仕事をはじめるようになったのは、離婚する半年ほどまえからで、出版社に勤

務する友人に誘われたのがきっかけだった。幸い一人息子を連れて夫と別れた後、仕事のほうはどんどん軌道にのってゆき、近頃では細々ながらなんとかやってゆける状態にまでなった。また両親と兄夫婦の住む実家へ息子と共に移り住んだことで、子育てからは大幅に解放され、おかげで仕事や外での人間関係がどんどん拡げられた。七歳になる道にしたって、祖父母や従姉たちと暮すことで、ずいぶん明るい子供になった。

さしあたっての不安や不満などほとんどないといってもよいくらい、アキラのいまの生活は安定していた。

それなのにどうしたというのだろう？　この空虚感は、この孤独感は？

世界のあらゆることが、自分の望まぬ方向に進んでいるという気がしてならなかった。だれもかれもが目先の変化ばかりに心を奪われ、かんじんなものに対しては見てみぬふりをしている。

しかし地球を被うそんな空気はいつしかアキラまでをも包みこみ、近頃はだれに会っても好奇心や感動が少しも湧かない。

自分たちはあまりにも多くのものを持ちすぎてしまった。しかも手を伸ばし口を開ければ、あらゆるものが寄ってくるので、それを追い払う勇気や必然性さえも、いまでは感じない。

日本中がヒビだらけになってしまい、そのヒビのあいだを、知識や情報やモノが悉く浸透している。それでも飽き足らず、人たちはさらに新発売、ニュー・ファッション、マネー・ゲイムなどといったハンマーで、残った箇所をうちくだいていく。

選りどり見どりといってもよいくらい、何もかもが溢れているというのに、結果的にはそのど

れにも満足できない。いっそ巨大な掃除機で何もかも吸いこんでしまったら、どんなにかサッパリするだろう！

そうして何もなくなった原野にポツンと立ったときこそ、アキラは自分がいったい何を求め、何を欲しているのかということが初めて解るのではないかという気がした。

高校のときの同級生で、いまや若ものたちの間でカミ的存在となっているシンガー・ソングライターのMをたまたまインタヴューした翌日には、ようやくバリへ行く決意が固まった。乗りにのっているMの知的通俗的傲慢さに、いつのまにか媚びて卑屈になっていた自分自身に、アキラはすっかり厭気がさしてしまったのだ。

「バリへ行こう、バリへ！」

こみあげる自己嫌悪をなんとか追い払わんとばかりに、Mと別れた後、原宿の駅へむかう道すがら、アキラはなんどもなんども声にして唱えるのだった。

アキラが今回バリのなかでもとくに、ウブドゥを選んでやってきたのは、ここにこそ多大な情報や物質で麻痺しきってしまった自分たちが、いま一度呼び起こさなければならない基本的な文化——自然のサイクルに逆らうことなく順応した、素朴な生きかたとでもいったものが、未だ残されているのではないかと考えたからである。

そんなアキラの期待を、ウブドゥが決して裏切っていないことを知るのに時間はかからなかった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com